

のぞいてみよう！ せんだいの歴史

ゆかりの絵画編

長崎の夢―「象図」を観る―

仙台市博物館 学芸普及室 二上玲子

第9回

今回紹介するのは、仙台四大画家のひとり菅井梅関（二七八四〜一八四四）が描いた「象図」です。ゾウの姿が画面からはみ出さんばかりに大きく描かれています。梅関は、なぜこのゾウを描いたのでしょうか。その謎に迫ってみました。

長崎へ

梅関は、京都で絵を学んでいたときに、清の画家・江稼圃が描いた絵の素晴らしさに感銘を受け、直接師事するため、来日していた江稼圃がいる長崎へと向かいます。文化一〇年（一八一三）ころのことでした。このころの長崎は、外国船が唯一来航する場所であり、海外交流の拠点でした。梅関は文政五年（一八二二）まで、一〇年ほど長崎に滞在し、多くの文人・絵師と交流を深め、充実の日々を過ごしました。

一方、文化一〇年の長崎では、ある出来事が起こっていました。六月に五歳のメスのセイロンゾウを載せた「阿蘭陀船」がやって来たのです。ゾウは將軍への献上物としてオランダ商館のあった出島に上陸しますが、幕府は受け取りを拒否し、三カ月後に送り返されます。

つまり、梅関が長崎を訪れていたであろうところ、ゾウがやって来ていたのです。梅関は、そのときに見たゾウを描いた可能性が考えられます。

しかし落款は、四〇代半ばころに画号を「梅館」から「梅関」に改めた後のものなので、梅関が長崎を去ったのちに描いたものと考えられます。

「象図」を観る

改めて、「象図」に注目してみましょう。波打った線で描かれた体は大胆にデフォルメされており、まるで山水図のようです。一方で、体のしわや毛、鼻先の形やしっぽの先の毛の房

など、ゾウの特徴をとらえた表現からは、ゾウをじっくりと観察したことがうかがわれます。また瞳に置かれた青い色が印象的で、遠い異国からの来訪者が何を思ったのか想像をかきたてられます。この



菅井梅関画「象図」 仙台市博物館蔵

後、送り返されたかと思うと、人間に翻弄された境遇に哀愁すら感じます。

長崎の思い

天保元年（一八三〇）、梅関は故郷仙台に戻ります。精力的に画作に打ち込みますが、その生活は、必ずしも順風満帆とは言えず、天保一五年（一八四四）自ら命を絶つたと言われています。六一歳のことでした。

梅関が、なぜ後になってゾウを描いたのか、その理由はわかりません。ただ、江稼圃との出会い、そしてゾウとの遭遇、長崎での刺激的な経験は、後から振り返れば梅関にとって夢のような日々には思えないではないでしょうか。

今回紹介した作品の画像は、仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース（二次元コード）」からご覧いただけます。



新収蔵品展

2017-2024

New Acquisitions : 2017-2024

3月22日土～5月1日日

資料(左から):
朝妻舟図 熊耳耕年筆(扇面貼交屏風のうち)、
宮城県指定文化財 薙刀 銘「国包」(部分)
すべて仙台市博物館蔵

おかげさまで
10万点!!

くわしくは、博物館ホームページをご覧ください。

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

【開館時間】9:00～16:45(入館は16:15まで)
【休館日】毎週月曜日(4/28、5/5は開館)、5/7(水)
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074

▶ 博物館ホームページ [仙台市博物館](#) 検索

▶ 博物館X(旧ツイッター) @sendai_shihaku